

「半生をかえりみて」試訳： 第三章、第四章、第五章

矢次綾*

A Translation of “Half a Life-time Ago”: Chapter III, IV & V

Aya Yatsugi

第三章

失神してしまうような打撃の後に、ことの重大さを認識する時が来る。スーザンは何時間もかけて辛抱強く、弟の心の中にある断片的な記憶や意識を思い出させ、つなぎ合わせようとした。弟に意味のない遊びを続けさせ、その視線や注意が自分に向くまで待ってから、自らに課したその仕事を始めた。マイケルが不満げに、君は僕と話そうとしないし、ほんの少しの時間でも僕と過ごそうとはしないんだね、と漏らしても、少しでも可能性がある間にウィリーの知性を取り戻す努力をしなくちゃと言った。この落ち着かない状況の中で、スーザンは結婚について考える気にならなかったの、かつとしたマイケルが二、三日イチイ農場に戻らないこともあったが、戻っても彼にとって状況が改善されてはいるわけではなかった。スーザンは目を泣き腫らしており、ペギーから、お嬢さんはあんたが出て行ってから何も召し上がってないのよ、と容赦ない叱責を受けた。しかも、スーザンの決心に何の揺るぎもなかった。

「まだ駄目なの。まだやることがあるの。だから、私が愛していないなんて二度と言わないで」と彼女は、彼の腕の中にその身を埋めながら言った。

八月を通して一事が万事さういう調子だった。オーツ麦の収穫はすんだが、小麦を蒔くにはまだ早いある晴れた日、マイケルは借り物の二輪の馬車でやって来て、ウィリーを乗せてやろうと言いつ出した。どこに行くの、とスーザンが尋ねたとき、マイケルはどこか混乱した様子だったが、その答は率直ではっきりしたものだった。

「アンブルサイドで用があるのだけど、ウィリーから目を話さないし、暗くなる前にちゃんと連れて帰るから」それで、スーザンはウィリーを行かせることにした。

日暮れ前にふたりは戻ってきた。ウィリーはマイケルに町の通りで買ってもらった小さな紙の風車を見てはかなりご機嫌で、そのおもちゃから絶えず聞こえる、それまで聞いたこともないブーンという音を一生懸命真似ようとしていた。マイケルも機嫌がよさそうだった。スーザンは後にその顔を思い出しながら、マイケルが隠しごとをしていて、*私と目が合うたびに、私の表情が重く悲しみに満ちたもの

に変わるであろうことを想像していたのだと考えることになる。彼は馬を小屋に入れた。もっとも彼は、三キロ離れた自分の農場までその後帰らなければならなかったのだが、月が、それも美しい中秋の満月が出ていたので、どんなに遅くてもかまわないと思ったからである。スーザンがマイケルたちのために用意した夕食が済むと、ペギーは二階で眠るウィリーの様子を見に行った。ウィリーには四歳の幼児と同じ世話が必要だった。

マイケルはスーザンに近寄って、言った。

「スーザン、僕はウィリーをプレストン先生のところに連れて行ったんだ、ケンダルのね。この辺りでは一番の先生だよ。僕たちのために、というか、君のために、ウィリーの容態について早いうちに確かめておいた方がいいと思ったんだ」

「それで？」とスーザンは熱心な顔をして彼を見ながら言った。彼の顔にはさきほど同じちょっとした満足感が見出せたが、後悔したような痛々しい表情に一瞬のうちに変わった。「先生は何ておっしゃったの？」と彼女は言った。「言ってよ！ お願い」

「ウィリーが治る見込みはないそうだ」

「見込みがない！」

「ああ、全くないそうだ。長いし、耐えがたい話だったよ。それからね、もっと悪くなるそうだ。先生によると、あの子は年々悪くなるそうだよ。それから、先生が僕たち、というか君なら、すぐにランカスター収容所にウィリーを入院させるとおっしゃるんだ。ああいう人たちをちゃんと世話して、幸せにする術をその人たちは心得ているからね。僕は言われたことを伝えているだけだけど」と言いながら、スーザンの顔が険しくなるのを彼は見ていた。

「先生が何をおっしゃってもどうってことはないわ」と彼女は取り乱さず冷静な声を出すよう必死に自分を抑えながら応えた。「誰だって自由に意見を言えるもの」

ふたりは黙って一、二分腰掛けていたが、スーザンは肩で息をしながら感情を表に出すまいとしていた。

ついにマイケルが口を開いた。「プレストン先生は賢明だと評判のようだね」

「そうかもしれないわね。でも、先生は、うちの作男ほどに賢明ではないし、何をお考えになると私はしたがうつもりはないの。それに、私の可哀な弟を、そんなひどいご意見をいただくために先生のところに連れて行った人

(2001年12月7日受理)

* 宇部工業高等専門学校 一般科 英語教室

にお礼を言うつもりもないわ。私がおの場にいたら、先生に正気に戻っていただくよう努力していたわ」

「そこまでだ！ 今夜はもう話すことはないよ。君は冷静に考えようとしていないけど、僕は行くべきだったし、君によく考えてもらいたい。確かに、聞くに耐えないひどい意見だろうよ、でも、一理あると僕は思う。君も耳を傾けるべきだ。いずれにしろ、僕の骨折りに対してそんな言い方はないよ。君のよくないところだ」と彼は気分をひどく害したように、立ち上がりながら言った。

「マイケル、私、悲しくてわけがわからないの。私がきつい言い方をしても責めないで。あの子と私はふたりきりの姉弟なの。それに、お母さんがあの子の面倒をみるようになって私に言ったのよ！ それに、あの子はこんなになっちゃって、ああ、可哀想に！」と言いながらスーザンは泣き出し、マイケルはそれを優しく慰めた。

「やめて」と彼女は言った。「可哀想なウィリーが『本能的』だってことを忘れさせようとしても無駄だわ。ほんのちょっとの間でもあなたと幸せになったりしたら、私は自分で自分を憎むわ。行ってちょうだい、そして、私に独りで考えさせて」

「よく考えるんだね、スーザン、それから、お医者さんの言ったことを覚えているよね？」

「忘れられないわ」とスーザンは言った。彼女は医者かウィリーには治る見込みがないと言ったことを忘れないと言いたかったのだが、マイケルが確認したのは、収容所か、当時その地域で使われていた言葉で言えば精神病院にウィリーを入院させるかどうかということについてだった。マイケルはかなり前から入院について考えており、父親とは既に話をしていたし、法的には認められないにしても、妻の権利によってイチイ農場とその周囲の土地が事実上自分の所有物になることに、密かな喜びを感じていた。彼が考えるスーザンの魅力には、彼女が父親から相続する多額の金銭が含まれていたが、最近では、イチイ農場の女相続人であることも重要な点であった。自分も兄と同様に土地を所有し、耕作し、利益を生み、それを子孫に残すのだ。長い間ずっと彼は、スーザンがウィリーの世話に手一杯で、自分との未来を待ち望んではいないのではないかとつぶかっていた。また、ウィリーについては、厄介者と考えていたのが、最近では毛嫌いするまでになっていた。ウィリーの意味をなさない言葉、見苦しい動き、鈍くて不恰好な歩き方、それらすべてが言いようもなくマイケルを苛立たせた。彼は二日間イチイ農場に近寄らず、スーザンが自分を恋しがり、自分の計画に歩み寄るための時間をあたえたつもりだったが、それは、スーザンにとって今までにないほど孤独な二日間となった。熱病にかかって以来、マイケルが二十四時間以上彼女に会いに来ないということにはなかった^{注1}ので、その二日間に初めてスーザンは、少女ではなく独りの女として悲しみに向き合った。マイケルがいないので、苛々の種がある程度取り除かれたのか、ウィリーはそれまでの数週間よりも大人しく扱いやすかった。姉の言

うことをきこうと努力しているのが見て取れたし、近寄ってもの言いたげに姉の顔を覗き込む様子は哀れで、失った機能を取り戻してくれるよう懇願しているようだった。

「あんたを行かせたりしないからね、ウィリー。絶対に行かせない！ どこに連れて行かれるのか、何をされるのかわかったものじゃないもの。聖書に『死がふたりを別つまで』^{注2}とあるようにね！」

当時その辺りの田舎では、白痴に対する残酷な仕打ちについて、いろいろと噂されていた。実際のところ、噂は根拠のあるものであって、噂のうちの一つでも真実であれば、この土地に強い偏見が存在していることを十分に立証できたであろう。スーザンは独りか、または彼女を唯一の味方として慕う弟と一緒に時を過ごしなが、弟を手放すまいという決意を固くした。ゆえに、戻ったマイケルはスーザンに、プレストン先生の助言にしたがうなんては全く問題外だと、静かな口調で言われて驚き、気を滅入らせた。彼は、渋々であろうと思っはいたが、スーザンが同意する以外のことを全く予期していなかったので、ひどく苛立ち、怒りを抑えることもできたのに、スーザンの自分への愛情を利用し優位に立つために、あえて怒りに身を任せた。しかし、どうしたわけか彼は行き過ぎてしまい、スーザンが自分に向けた激しい怒りに圧倒されることになった。

「あなたに弟と同じ家に住む権利はない、分かるわね？ 私の知る限りで、あなたが一緒に住む必要もないの。私には家族と一緒にいるちゃんとした理由があるし、お母さんが死ぬときにした約束を守らなければならない理由もあるの。でもね、あなたとは絆がないから、アメリカでもボタニー湾^{注3}でも、それがあなたのご希望なら、今夜のうちに行ってしまいたいとおっしゃっても止めたりしないわ。可愛い弟を手放させようとするなんて、そんな脅しには断じて乗らない。私と結婚するんだったら、ウィリーの面倒を一緒にみてちょうだい。だったら結婚しないっておっしゃるのなら……結構よ！ あなたを軽蔑するだけで、どうってことはないわ。それほど愛してるわけじゃないもの。ウィリーに家から出て行けなんて、いばっておっしゃるのなら、私はあなたと一緒に住まない……そうよ、この家はあなたが足を踏み入れる前から、ウィリーのものなのよ。ウィリーはここに住むし、私はあの子と一緒にいるわ」

「そこまで言うことはないだろう」とマイケルは怒りで青くなって言った。「君が言うように僕が自由でカナダにでもボタニー湾にでも行けるのなら、好きなどころに住む自由だってあるさ、どのみちいつかは発狂するような白痴と一緒にいることはない。スージー、そいつが僕が選ぶんだな。両方を選ぶなんてできないからな」

「もう選んでいるわ」とスーザンは完全に落ち着き払って言った。「どんなことになっても、私はウィリーと暮らすわ」

「結構」と同等の落ち着きを必死に保とうとしながらマイケルは言った。「それじゃあ、おやすみ」外へ出ながら、彼は呼び戻されるだろうと半ば期待したが、それどころか、

聞こえたのは、苛だたしげな足音と錠が下りる音だけであった。

「ふう」と彼は独りごちた。「スーザンに一、二週間時間を作って正気に戻るのを待つとしよう。僕なしで暮らすのはそれほど簡単じゃないと気づくだろうさ」

そう言いながら彼はのん気な様子で台所の窓を通り過ぎ、数週間イチイ農場に顔を見せなかった。その間何をしていたのかといえば、最初の一、二日は出くわした人にしる、ものにしる何に対してもいつになく不機嫌だった。小麦の収穫が始まると忙しくなり、ずっしりと重い麦の穂を手に持ち、得意満面になった。彼はすぐにイチイ農場に移るだろうと思われたので、彼の農場は父親の助言によって売りに出されていたが、遠くから男がやって来てその農場に値を付けた。スーザンの決心がそれほど固いと思っていたことがあって、マイケルはその男と交渉を始め、収穫したばかりの麦を見せ、自分に有利なように何とか商談を進めた。もちろん商談は居酒屋でまとめられ、そこにたむろする人々とも打ち解けて、その後ラングデイルへ行き、そこでエリナー・ヘブスウェイトと再会した。

スーザンはこの間をどう過ごしていたか？ 最初の一日か二日はあまりに立腹していたので、涙も出なかった。家事を手早く迅速に強引に、しかし放心したような様子でこなし、ウィリーの様子にたじろいだかと思えば、良心の呵責に苛まれたかのような愛撫をして弟を当惑させもした。マイケルが去ってから三日目、ほっとしたのかひとしきり泣くと、ずっと穏やかで優しい気持ちになり、マイケルにどんなにきつい口のきき方をしたか、どんなに腹を立てていたかを思い出した。彼に対する言い訳を考えてみた。「あの人が私に腹を立てるのも当然だわ、私が優しく話そうとか情理を尽くして話そうとかしなかったのだから、あの人が自分を曲げようとしなかったのも不思議はないわ。悪いのは私だし、彼にそう言うべきだわ。それから、ウィリーのことでお母さんに頼まれたことや、精神病院について聞いた恐ろしい噂をもう一度彼に離さなければ。そうすれば、あの人はすぐに私の味方になってくれるわ」

スーザンはマイケルが戻るのを心待ちにし、再会したらすぐに謝るつもりだった。急いで家事をすませると、静かに座って縫い物を始め、聞き耳を立てて懐かしい足音や口笛が遠くから聞こえて来るのを待った。しかし、縫い針の音さえ大きすぎたのか、心の底から願う時期を逃しつつあったのかもしれないが、縫い物の手を止めると、ゼラニウムの葉の間から切望して外を眺め、マイケルがいつも通っていた小道を覆う木々の最初の揺れを見逃すまいとした。鳥が巣から飛び立つことも時折あるが、そうでもなければ、まだ蒸し暑い初秋に木々が揺れることはない。スーザンは再び縫い物を始め、ある程度縫い上げるまで何もせずただ期待感に身を任せることをすまいと決心した。夜の帳が降り、その日彼が訪れる可能性が消えてしまうと、彼女は辛くなった。それでも彼女はいつもより長く起きていた。もし、あの人が戻ってきたら……遠くの道をただ通りすぎ

ているだけだったとしても……家中が暗く寝静まっているように見えても、窓辺の明かりが見えれば、遅い時間だけど尋ねてみようかなという気持ちになるかもしれない。

辛く、心底疲弊してスーザンは寝床へ入った。孤独感と絶望感から泣き声もたてることも、うめき声もあげることができなかった。しかし、朝になると新たな希望が湧いた。新しい一日には新しい可能性があるはずだ！ その繰り返して数週間が過ぎた。ペギーは若い女主人の悲しみが痛いほどわかったが、その心情を考慮して何も言わなかった。苛々したマイケルがいなくなったので、ウィリーは以前より機嫌がよいようだった。哀れな白痴ながら、ウィリーはマイケルに嫌悪感を抱いていた。それはマイケルが自分を毛嫌いするのに対する彼の心の反応だった。このときイチイ農場で最も幸福なのはウィリーだった。

ある土曜日、コニストンにバターを売りに出かけたスーザンに、マイケル・ハーストを昨夜見たよ、などと言う軽率な者がいた。軽率というより観察力がないと言った方がよいだろう。スーザン・ディクソンと十分もいっしょにいれば、喜ぶべきものであると悲しむべきものであると、心の奥底にある問題に触れられたくないのを見て取れるからだ。彼女は熱病を患って以来頬の赤みを取り戻せずにいたが、その顔はいつもよりも青白くなった。スーザンは平静を保とうとしたが、衝動を抑えきれなくなって尋ねた……

「どこで？」

「トマス・アプルスウェイトの家さ、ラングデイルのね。総出で刈り取りでもやってみたいでさ、奴も手伝いの若者の中にいたよ、エリナー・ヘブスウェイトと熱々みただげ、老トマスの姪のエリナーさ。もうちょっとよく奴を見張るといたほうがいよいよだな、スーザン！」

スーザンにはこりともしなかったし、ため息をつきもしなかった。彼女と話をしていた人たちは、そのぞっとするほど静かな表情に驚いた。彼女自身、筋肉の隅々まで自制心が働いているのを感じながら、スパルタ人のように落ち着き払って、「私には耐えられる、怯んだり怖気づいたりしない」と心の中で呟いた。それから、茂みであろうが生垣であろうが目の前にあるものに果敢に分け入り、掻き分け掻き分けしながら、この上なく激しい足取りで家路を急いだ。彼女の留守中、ウィリーは塞ぎ込んでいた。大儀そうに農場の門につかまって、姉が戻るのを待っていた。そして姉を見るなり、奇妙で不明瞭な声をあげ、興奮して頭や手足を揺らしながら、ぎこちないギャロップするような足取りで駆け寄ってきた。その時までスーザンは弟の叫びが何を意味するのかを理解するようになっていたが、急に彼に背を向けると、わっと泣き出した。家から百ヤードと離れていない道端の石に腰掛け、顔を手で覆い、やり場のない悲しみに身を任せた。その押し殺された泣き声は激しく苦悩に満ちていたので、白痴のウィリーも仰天し、黙ってその場に立ちすくんだ。彼のつかの間の喜びは消えてしまったが、姉の喜びのように灰になったわけではない。

彼の頭にある考えが浮かぶ。そうだ！ 姉の悲痛な姿を見ながら、そして、かなりの努力を要しながら、ウィリーは考えた。彼は始終口をブンブン鳴らし、何度もよるめきながら家へと走った。スーザンは弟から目を離さなかった。すぐにウィリーは大切な紙の風車を持って戻ってきた。マイケルにケンダルへ連れて行かれ、正気に戻ることはないと宣告された運命の日に、彼が買ってもらったものである。ウィリーは壊れやすいおもちゃが傷つくことなど構いなしに、姉の顔や、手や、膝にそれを押し付けた。そして、姉の正面に来て、前よりも大きな声でブンブン言いながら、お姉ちゃんは元気に鳴ったかな、と考えた。スーザンは顔を上げて弟を見たが、その目が悲しそうだったので、彼は黙り込み、理由のわからないままぐずぐず泣き出した。今度はスーザンが慰め役になり、弟を泣き止めさせようと風車をぐるぐる回そうとした。しかし、風車は壊れていて音をたてなければ回りもしない。それが弟よりも姉の気持ちを暗くしたようだ。彼女は無駄とわかっているのにそれを直そうとした。そうしながら、頭を垂れ、紙のおもちゃに報われない涙を落とした。

「直らないみたいね。もうもとはもどらないわ」と、彼女はついに口を開いて言った。そして、壊れたおもちゃと自分自身の言葉が、破局する愛の前兆のような気がして、もはや修復はできないのだろうと思った。そして立ち上がりウィリーの手を取ると、ふたりでゆっくりと家へ向かった。

すると驚いたことに、マイケル・ハーストが居間に腰掛けている。居間と言ってもきれいな方の台所のことで、そこで調理はせず、大事な用があるときに使われるのである。マイケルが家の中で待っていたのは、姉を連れていたためだった。マイケルの唯一の姉で、ケジツクの先で幸せな結婚生活を送っていた。スーザンに会いに来るのは初めてだったが、マイケルは、ウィルについて、また、スーザンとの結婚を通して自分が占めることになるであろう立場について、それぞれに関する希望を、前もって姉に伝えていた。姉の世間的な立場に、彼は敬意と憧れを抱いており、スーザンの最大の魅力と考え始めていた資産のすべてに対して、姉には好印象を抱いてもらいたかった。だから、イチイ農場に着いたときスーザンは不在だったが、彼は躊躇することなく姉を居間へと招き入れたのである。彼は心の中で、もしエリナー・ヘブスウェイトとスーザン・ディクスンが同等の資産を持っているのなら、自分にはエリナーの方がずっといいと呟いていた。彼はスーザンのことをわずらわしく思い始めていて、それまでの彼女とのことを思い返すときに、まず頭に浮かべるのはその寛大で愛すべき性質よりも、熱しやすくせっかちな気性の方であった。

そして、そんなマイケルと、スーザンは顔を突き合わせている。彼女は目を泣き腫らし、衣服は汚れ、茂みの小道を早足で歩いてきたので、あちらこちら破れてもいる。際高級の絹で身を包み、こざっぱりと身なりのよいゲイル夫人によい印象をあたえるはずはない、とスーザンはいつに

なく他人の外見に敏感になっていた。彼女の態度は優雅でなければ、誠意のこもったものでもなかった。マイケルと前に会ったときのことを忘れられないのに、ほかにどうあれと言うのか？ 後悔の念もこの難儀な数週間の中に、毎日失望させられながら薄らいでいたのだから。

それでも、実質的にスーザンのもてなしはよかった。ペギーに急いで湯を沸かさせ、自分はティーカップの準備をした。初対面のゲイル夫人のおかげで、自分と同様にマイケルの心中にもあるに違いない例の件を、すぐに蒸し返さずにすみそうなことに、感謝の念を覚えた。しかし、ゲイル夫人はこういった微妙な心情を考慮して自分を抑えたりしない。夫人はこの件について話をする心の準備を十分にしていたし、スーザンを正気に戻すつもりだった。時間を無駄にしてはいけない。夫人が話を切り出す前にマイケルは農場の庭に散歩に行くという手はずが既に整っていたが、ゲイル夫人はスーザンを言い含める自信があったので、早く片をつけてしまうつもりだった。ゆえに、スーザンがしたうべき道理を、雨霰を浴びせるように説いた。スーザンは長い間応答しなかった。家庭の悲しみと恥辱の奥深くに他人がこうやって入り込んでいるのに、激しい憤りを感じていたからだ。ゲイル夫人は自分に利があると思い、さらに情け容赦なくスーザンを説き伏せようとした。マイケルでさえ姉の勢いにたじろぎ、スーザンの沈黙について思いを巡らした。そして、立ち上がり光のあたらない方へ向かいながら、姉が優位に立つことを望んだが、ことを収めんとする姉のきついやり方には嫌悪感を覚えた。

ゲイル夫人の話に没頭しているように見えていたスーザンだが、急にマイケルの方を向き低い声で問いかけた。彼女は声そのものを震わせていただけでなく、歯切れの悪さで聞く者を身震いさせもした

「ねえ、お姉さんのおっしゃることをその通りだと思っ
ていらっしゃるの？」

ふたりの女は彼をじっと見つめながら返事を待った。ゲイル夫人は、弟と話したまさにその言葉を使い、弟が意図したまさにその論理を使わなかったとしても、不安がなかっただろうか、と考えた。一方のスーザンは、人生の宣告を待つかのようだった。その目は希望よりも絶望の色の方が濃かったかもしれない。

マイケルは自分の立場を曖昧にするかのような、返答をした。

「何を言い出すんだよ？ 姉はちゃんと話しているじゃないか」

「私が知りたいのは」と、言葉使いも発音も水晶のように澄みきっているよう心がけて、スーザンは言った。「あなたはウィル容態をご存知だけど、私があの子の面倒をみる手助けをしてくださるかどうかってことなの。私はそうすると死に際の母に約束したわけで、つまり、私はずっとあの子を傍にいて、あの子が幸福な人生を送れるよう力を尽くすの。もしあなたが助けてくださるのなら、私はあなたの妻になる。そうでないのなら、私は独身のままでいるわ」

「でも、ウィルは暴力をふるうようになるかもしれない、ただの厄介者にだってなり得るんだ。ここに一緒にいるだけで、苦痛を感じるようになるよ、スーザン、喜びではなくてね」

「手伝ってくださるのか、くだらないのかを言っていたきたいの」と、スーザンは、マイケルが調子を合わせているのに、質問させまいとしているのにやや軽蔑を込めて言った。彼はそれを察して、苛立った。

「前に言ったじゃないか。前にここに来たときに僕は君の質問に答えている。白痴と一緒に住む気はない、ああ、住んだりしないさ。これが僕の答だ」

「分かったわ」と言って、スーザンは深いため息をついた。

「ねえ、スーザン」と、スーザンのため息に勢いついてゲイル夫人が言った。「他人はあなたがマイケルを愛していないのだと思うわよ、そんなに頑固な態度だと。どう考えてもあの子のためなのに歩み寄ろうともしないなんて...」

「ああ！ 彼女は僕を好きではないんですよ」とマイケルが言った。「今までだって好きではなかったんだ」

「私があなたを愛していない？ 今まで愛していなかったと言うの？」 スーザンは怒りに満ちた目で尋ね、すぐにその場を去ると、お茶はペギーに入れさせた。台所でふらふらしていたウィリーにふと目を留めると、彼を連れて二階へ行き寝室に閉じこもり、弟を胸に抱くと、息もできないほど強く抱きしめながら、自分の声を出して弟を刺激して弟が奇妙な叫び声をあげたり、物音を立てたりしないようにした。弟の声が階下にいる姉弟に聞かれるなど耐えられないからだ。

ドアを叩く音がした。ペギーだった。

「マイケルさんが会いたいとおっしゃっていますよ、お別れの挨拶をなさりたいと」

「私は行けない。ああ、ペギー、追い出してちょうだい」 共感を求めて彼女があげた唯一の叫びだった。ペギーはそれを理解し、何とかふたりを追い返したが、理解していただきたいが、丁寧にお引取り願ったわけではない。

「いいことがあの人たちと一緒に行ってしまおう」とペギーは嫌な顔をしてふたりを見送りながら言った。「悪いものも何とか追っ払ったってことさね」そして家に戻り、昼間は市場で辛く、夕べはもっと辛かったであろうお嬢さんに何か食べるものを準備しようと台所に向かった。そして、誰もいない居間を通り抜けながら、まだそこに残っていたカップと姉弟の食べ残しに対して軽蔑を込めたしかめ面をし、ふと気づくと、台所ではスーザンが袖をたくし上げエプロンを着け、かいがいしくパン焼きの準備をしている。パン焼きは丘陵地帯の女にとって最もきつく力の要る仕事だった。^{注4} スーザンは顔を上げペギーと目を合わせたか、それをすぐに逸らした。ペギーの目があまりに同情的であったからだ。スーザンの顔は赤く、目は乾き燃えているようだった。

「ペギー、平板はどこかしら？ パンを焼かなくちゃ。気づいたのだけど、今夜ならパンを焼く時間があるの」その声はどこか鋭く乾いており、動作はぎこちなかった。

ペギーは何も言わずに、必要なものをすべてスーザンのために準備した。スーザンは力を込めて生地を打ち、薄くのばした。生地の上で前かがみになり、没頭しているつもりなのに、自分は何をしているのだらうと思っていると、口に何かが触れるのを感じて驚いた.....何が触れているのか、最初はわからなかった。それは一杯のお茶で程よく甘く冷ましてもあった。その唇にいい具合にカップを当てているのは、優しい老ペギーだった。スーザンはほんの少しだけカップを離すと、ペギーの目を覗き込み、不思議な安堵の涙で自分自身の目をいっぱいにした。

「お嬢さん！」とペギーが厳かに言った。「お嬢さんはよく頑張っているわ。苦しみは長くは続きませんよ、終わりが来ますよ」

「あなたは年よりだからそう思うのよ」とスーザンは震えながら言った。

「若いときなんてほんの一日の出来事ですよ」とペギーは答えたが、言葉を続けず、スーザンの唇に優しくカップをまた押し当てた。飲み終わると、スーザンは再び仕事にかかった。ペギーは炉に火を入れ、必要だとわかっていることすべてをしたが、口は開かなかった。^{注5} 秋の夕べは肌寒く、ウィリーは火にあたりながら動物のように暖かさを楽しんでた。忘れられないその夜、ふたりが寝床に入ったのは夜中の一時だった。

第四章

仕事に打ち込むというスーザン・ディクソンの決心は長く続かない。思い出しては物憂い気持ちになる時.....過ぎ去った日々を心の底から懐かしく思う時が来た。思い出は鮮やかで甘美なものなので、実はそれが今も続いていて、わびしい現実こそが夢であるように思える。記憶の中で経験する感触や、聞こえる声に魔法のような甘さを覚えて新たな笑みを浮かべ、どうにもならないほど苦しい結末が来ることを知っているのに、一杯の毒酒を飲んでしまう。

「去年の今頃、私たちはいつも一緒だった、そうよ、ちょうど去年の今日だわ、ちょうどこういう日だった。紫や金色の陽の光が丘を照らしていて、木の葉が色づき始めていた。陽のあたる斜面のあちらこちらに切り株だらけの原があって黄褐色に見えた。あそこにある粘板岩の、紫色した裂け目に、光る銀の糸みたいに小川が流れ.....そう、今と同じように流れていたわ。あの人、細くてゆらゆら揺れる木に登って、枝を揺らして、落ちてきた木の実を私が集めたり、あの方はハシバミの林を抜けながら、こっちにおいでよ時々呼んだりするの。どうして彼が私を愛していなかったなんて言えるの？.....誰も言えない、誰も言えないわよ」

夕闇迫る頃、スーザンは空想に身を任せながら、マイケルがやって来る足音を聞き、この上ない喜びを思い出したが、その喜びはその後に訪れていた情熱的な味わいはないままに過ぎ去って行った。それから彼女は、自分がしてきたことを認めるだけの力、我が身を貫くほどの残酷な力どうすれば獲得することができるのか、固い決意で自分自身を突き刺し、死ぬまで消えない傷を残すのだろうかと思ったものだ。認めるべきなのかもしれないが、あまりに辛いので、直感的に、見とめたくないと思ったのだ。強い義務感を覚えなければ、人生はどんなに楽だろうか！ 多くの人たちがそういう人生を歩んでいるのだから、スーザンだって楽な道を選んでよいはずだ。彼と一緒に過ごしたあの甘美なときを取り戻すために！ もし今マイケルが現れるなら、スーザンはどんなことを提案されても、彼に同意するの。

心の熱病に病んでいたが、彼女はそれを切り抜け、弱ってはいるが、健康を取り戻した。今一度、スーザンは見えざる案内人の後についてイバラの道を辿ることに喜びを見出すことができるようになった。彼女は回復し、庇護すべきウィリーへの愛情は十倍になっていた。ウィリーこそ人生のすべてと自分に言い聞かせた。ウィリーの傍を離れなかった。イチイ農場の真の主であるウィリーのために、彼女は執事かつ後見人として細心を払って資金を貯め、利益の追求を旨とするようになったが、ゆえに彼女は後に守銭奴と噂されるようになる。彼女はその時点でもウィリーが僅かながら感覚機能 単純な喜びや興奮をいくらか得られる程度の機能 を取り戻すかもしれないと考えており、治療費を貯めておきたかったのだ。金が不足してはならない。ペギーは他の何よりもスーザンの節約生活の助けた。節約はその地域の慣わしであったし、ある程度の許容の範囲内での強欲さは、ペギーの世代全体に見られるものでもあった。そして、ふたりの女はウィリーにだけは金がないという理由で切り詰めさせたり、我慢をさせたりしなかった。

心をより健康な状態に戻すためには一つの報酬が必要だとスーザンは思った。熱病に苦しみながら、意識を失い、義務が無となり、無秩序が支配する状態を経験したのだから。この報酬こそ、彼女が非理性的な思いを爆発させる最後の契機であって、当然の結果として痛みを伴うこともはっきり認識していた。もう一度彼に会わねばならない……自分の姿は見られないようにして。

忘れられないこの年のクリスマスの前週、初冬の薄暮の中、スーザンはショールと外套に身を包んで出かけた。黒いショールをボンネットの代わりに頭から被り、その上に外套を着た。それから濡れた小道を踏みしめ、何マイルも何マイルも霧雨に打たれながら、彼の住む場所まで来た。ラングデイルの農家で、街道から急な石畳の小道を登り詰めたところに門があり、その門の傍には小さなイバラの生垣があった。もっとも、葉がすべて落ちていたので生垣に隠れることはできなかったが、その間から枯れたイチイの

木が伸びていたの、彼女はそこに身を縮め、顔が見えないようにショールの端で顔を隠して闇夜に紛れた。^{注6} 長時間そうしていた。身体が冷たく痺れてきて、容易に動くこともできないほど身体が固く感覚がなくなっていった。しかも、彼が現われそうにはない！ しかし、彼女は必要なら夜明けまで待つつもりだったので、パンを一切れ取り出すとつまみしい食事をした。雨は止んだが、しんと静まりかえり、じめじめした陰鬱な天気が続いた。夜なので遠くの音も聞こえた。馬の蹄が街道の石畳を、それから彼女が背を向けている小道にできた水溜りを歩いていく音が聞こえた。馬は二頭のようなのだが、彼女の思うに、うまく乗りこなされていないか、うまく先導されていないかのどちらかのようだった。

マイケル・ハーストと同行者が近くに来たが、それほど酔っているわけではなく、しかし、全くしらふというわけでもなかった。ふたりは門のところで立ち止まり、やけに感傷的な別れを交わした。マイケルは前かがみになり、持っていた杖の金具で門を開けようとしたが、その杖はマイケルの手から落ち、スーザンの近くまで転がってきた……実際に、ちょっと位置を変えれば、スーザンがそれを取って門を開けてあげられるほどだった。マイケルは大声で悪態をつく、馬のせいで杖を落としたかのように、強く握り締めた拳骨で馬を叩き、馬から降りて門を開けると手探りで杖を探した。杖を見つけると（スーザンの手がもう一方の端に触れていた）彼は杖で馬をしこたま打ったので、スーザンは馬に蹴られたり突っ込まれたりしないよう必死だった。それから、マイケルはさらに悪態をつきながら小道を登ったが、再び馬に乗るほどにしらふではなかった。

夜明けまでに彼女はイチイ農場でのいつもの仕事に戻った。春が来ると、マイケル・ハーストはエリナー・ヘブスウェイトと結婚した。結婚し洗礼式を経て炉辺を楽しく喜ばしいものにする者もいれば、旅に出て、何年も経ってから素晴らしいお土産話を多く携えて戻る者もいる。おそらくそれほど多くの例はないが、ウェストモアランドの丘陵地域には住まいを変える者もいる。いずれにしろ、多くの場合、イチイ農場よりは多くの変化が訪れる。イチイ農場ではこの上ない単調さで季節が巡り、変化があるとしても、ゆっくりと朽ちゆくような、憂鬱な変化だ。老ペギーが亡くなった。表面的にはぶっきらぼうだが、静かな思いやりを持った彼女を、スーザンは失ってしまった。そんな不幸が訪れたとき、スーザンはまだ三十歳に満たなかったが、老婆とは言わないまでも中年に見えた。人が断言するには、十二年前に熱病を病んで以来スーザンは頬の赤みを取り戻すことはなかった。父親を死に至らしめ、ウィリーを白痴にしたあの熱病以来である。ひどく顔色が悪いのに加えて、その顔にはくっきりと深く強固な皺が刻まれた。瞳の動きは遅く鈍く、目元や口元にはしっかりと小皺が植え込まれていた。骨には一オンスの余分な肉もなく、あらゆる筋肉は労働に耐える強さを備えていた。ペギーが亡くなった今、他人には見られないほどの肉体的な強さが、スーザンには

必要だった。というのは、ウィリーは身体的には大きく強く成長し、普段は大人しかたが、時々塞ぎ込むと、それから暴力を振るったからである。この発作は一日か二日続くのだが、スーザンの用心深い配慮によって発作があること自体が、秘密にされ他人には知られていなかった。ごくたまに近くの寂しい街道を人が通り、家具にぶつかる音、強打する音、そして、寂しい農家で悪魔が泣いているような声を聞いたものだが、暴力的な発作はおおかた夜に起こり、どんな結果がもたらされようとも、その普通には見られない痕跡を、スーザンは翌朝までに消してしまった。彼女が何より恐れたのは、自分が時折さらされている危険に誰かが気づき、自分の庇護のもとから弟を引き離すべきだと考えはしないかということだった。時が経つにつれて弟の面倒をみることはますます重たく彼女にのしかかっていたが、それは生きる糧として彼女の心に刻まれもいた。犠牲を払ったことで、この糧は彼女にとってより大切なものになった。彼女はまた、大人しく愛情深く、不器用で、治りの遅いウィリーと、時折悪魔に取り付かれては姉を恐怖にさらすウィリーとを、明確に区別した。一方のウィリーは彼女の血であり肉であり、亡き母の大事な息子だが、もう片方のウィリーは彼女の愛する弟を苦しめ身悶えさせる悪魔であった。乱暴な手を抑え、今にも厄介ごとを起こさんと振り上げられ落ち着かない腕を縛り上げながら、弟の戦いを自分も戦っているのだとスーザンは信じた。力の限り巧妙に弟を抑制しながら、弟に対する哀れみの言葉を呟くか、激しい調子で第三者、すなわち敵である悪魔を罵るかした。朝に向かって発作は力を失い、ウィリーは眠りに就いたが、邪悪な力が息を吹き返さない限りその眠りが中断されることはないだろう。弟が横になると、スーザンは新鮮な空気を吸いに外に出て、独りで叫んだりぶつぶつ言ったりして言いようのない悲しみを払いのけた。早起きの労働者たちは遠くから彼女の姿を見て、その界限を悪魔に取り付かれた場所にしてしまった白痴の弟のように、スーザンも発狂したのかと思った。しかし、たとえ誰かがその日のうちにイチイ農場を訪ねたとしても、平然として口数が少なく冷静で、そっけなく、抜け目ないスーザン・ディクスンに会ったであろう。

一度だけ、この暴力的な発作がいつもより長く続いたことがあった。スーザンは精も根も尽きかけていたが、彼女自身も発狂してしまうか、悪くすれば、人生の糧を放棄せざるを得なくなり、ウィリーを精神病院に明け渡してしまうかする前に、何とか発作がおさまるよう必死に祈った。後にスーザンは迷信に取りつかれたように考えたのだが、あの祈りの瞬間からウィリーは静かになり……力を失い……衰え……消耗しきって、ついに現実世界から去っていった。

死の床のウィリーは穏やかで優しいがであったし、鈍い苦悶の声をあげさせていた魔力がなくなると、知性が戻ったかのような不思議なしかも子供らしい光がその顔を覆っていたので、スーザンは前にも増して強い絆で弟と結ばれて

いるような気がした。白痴でも、不器用で一途な動物的な愛で自分を愛してくれたり、どんな生きものでも、迫り来る狡猾な敵から守ってくれるよう嘆願するような目で自分を見つめてくれるのは、特別なものである。しかも、死は弟にとって敵ではなく、霧に覆われた哀れな精神に光と健康を取り戻してくれた真の味方であることを、彼女は知っていた。死が敵なのは彼女にとってであった。ウィリーが死んだ今、生き残った彼女を愛してくれる者は誰もいないし、それよりも辛いのは、彼女には愛すべき者がこの世にいないということだ。

もうお分かりであろう、なぜ彼女がさまよう旅人を客として迎え入れないのか、疲弊した旅人に休息と食事をあたえないのか、なぜ長い間独り住まいで、ぶっきらぼうな振るまいをするようになったのか、そして、なぜ利益を追求し、冷たい守銭奴となってしまったのかを。

しかしながら、スーザン・ディクスンの人生の幕はまだ下ろされてはいない。

第五章

スーザンの辛い人生は長く続かないであろうとベギーが予言したにも関わらず、それは退屈で終わりがないように感じられ、年月がその単調な螺旋を解く速度も遅かった。スーザンは自分で変化を起こすこともできたかもしれないが、そうしようとはしなかった。実際のところ、ある程度の「惰性の力」によって現状に甘んじ、進んで変化を起こさないというよりもむしろ、変化を起こすという目標を持つことが、それを達成するための必要不可欠な力を呼び覚ますほどに重要だとは思えなかった。それどころか、スーザンは必死になって変化や多様性を避けようとした。新しい知り合いを作るほどを病的なほどに嫌ったが、それは、亡きウィリーのことを完全に秘密にしておきたいと願ったからであった。新しいやり方を見下したが、彼女の古いやり方は実際に、そのよく動く手と用心深い目のもとでは大変有効だったで、それをいかにして今よりよくするかを考えることの方が難しかったのである。最高級のバターとその季節でもっとも早い鶏肉を携えて、定期的にコニストンの市場を訪れた。それらは農家の主婦たち誰もが手作りし、市場で売るものであったが、スーザンはどちらかと言えば女性的な仕事をしなくなり、男性的な役割をするようになっていた。彼女よりもうまく馬や牛の状態を見極める者はその周囲にいなかった。ヨークシャーが一丸となって彼女を欺こうとしても、そんなことはできなかったであろう。彼女の作る小麦は良質だったし、ジャガイモは次の春までよい状態で保存された。人々はスーザンがどこかに蓄えているに違いない財産のことに噂するようになり、とある農家のろくでなしの息子が、どう見ても五十五歳の四十女に求愛する役を引き受けたこともあった。その息子は媚びを売ろうと、短時間で買い物すませ裸馬に乗って

帰路に就こうとした彼女のために、門を開けてやった。彼女は馬から降りて、息子の好意を拒否した。もっとも、再び馬に乗るのは容易いことではなかったが、彼女はまた乗ろうと試みたりはしなかった。彼女は歩き出した。息子もその横を歩きながら、自惚れの強いことに、もっとよい機会が自分には訪れるであろうなどと無駄なことを考えていた。イチイ農場が近づくと、彼は思い切って、一緒にいたいのだが、というような言葉を彼女に言ったが、曖昧で木が利かない言い方だった。スーザンはぐるりと振り返ると、何が言いたいのかと冷たく尋ねた。彼はスーザンの財産を頭に浮かべて勇気を奮い起こし、今度はかなり率直に自分の希望を告げた。彼を驚かせたことに、スーザンは返事をする代わりに、しなやかな八シバミの枝で彼の肩を何度か強打した。

「覚えておきな！」と、息も絶え絶えになって彼女は言った。「母親と言ってもおかしくない年齢の、善良な女を侮辱すると、どういうことになるかをね。もし、一步でも家に近づいたら、そこには大きな馬用の池があって、二頭の頑丈な馬がお前をそこに突き落とすからな。行ってしまえ！」

そして彼女は自分の農地へ大まかに入っていくと、その男が自分の命令にしたがったかどうかを、振り返って確かめることさえしなかった。

マイケル・ハーストの名を聞かずに三、四年が過ぎてしまうこともあった。そんなときスーザンは、彼が死んでいるのか生きているのかどちらなのだろうかと考えたものだ。冬の夕べ、消えゆく暖炉の傍に何時間も座って、若い頃のことや、その頃の知り合い……とりわけマイケルの顔を思い出してみようとした。長い年月が過ぎたのだから、お互いに気づくことなく、通りですれ違うこともありうと思われたが、外見でマイケルが分からなくても、身体の震え彼の存在を分からせてくれるだろう。マイケルにしても、気づかずに彼女を素通りするなどできまい。

マイケルの噂を聞くことはほとんどなかったが、スーザンの耳に入るとすれば、彼の墮落を暗示する噂ばかりであった。やるべき仕事がないという祝時のときだけではなく、種蒔きのときも収穫のときも絶えず彼は酒を飲んでいるとのことであった。子供たちが同時に病にかかってしまい、うち一人は死に、生き延びた子供たちも哀れなことに病弱だという。彼女のかつての恋人について、本人の前で露骨にその噂をするものはなく、多くの人は彼女がいるときに彼の名を言及するのを避けていたが、昔のことを知らない者や、無頓着な者が話してしまうことはあった。スーザンは彼に関わるあらゆる言葉、あらゆる呟き、あらゆる音に耳を傾けた。しかし、目の表情を変えることもなければ、顔の筋肉を動かすこともなかった。

とある十一月の夜遅くに彼女は火の傍に腰掛けていた。家の中には彼女のほかに誰もいなかったし、ウィリーが泣くなってから、彼女のほかに誰もその家で眠った者はいなかった。農場の作男たちは家畜に餌をあたえ、何時間も前

に帰っていた。温かい炉辺の石の周りではコオロギたちが陽気な音を鳴らしており、時計はスーザンが子供の頃から知っている特有のチックタックという音を出して時を刻んでいた。子供のときから彼女は、なぜかその音を、母親と子供が共に話をしているときにたてる声と同じだと感じていた。片方がチックと大きな、しかも素早い声をあげると……もう片方の弱々しいがはっきりした声が続くのである。

その日は肌を刺すように寒い日だった。空全体が鉄製の丸天井のようだった。残酷な東風のせいで、黒い地面は霜に覆われていた。ふと風が止むとあたりは真っ暗で、天候を熟知する年寄りの作男たちは、雪になるだろうと言った。大気が揺り動かされる音が再びする中、じっと静かに座っていたスーザンは、大気を揺るがす音が再び大きくなったが、その音は東風が優勢だったときのそれとは違う。東風が吹くと大気は笛の音のような甲高い音をたてるのだが、今は、遠くで低い声で吠えているような、音楽的でないこともないが、奇妙な脅迫的な音をさせている。スーザンは窓辺に行き、カーテンを片側に寄せた。あたり一面白かった。素早く落ちてくる重たい雪で向こうの方が見えない。今のところ雪は上から下へと落ちていますが、遠くの丘のくぼ地や峡谷から聞こえる音から、強い風ともっと激しい嵐がすぐに来るだろうと、スーザンは思った。彼女は羊たちのことを考えた……ちゃんと囲いの中に入っているだろうか？ 生まれたての牛たちはちゃんと寝床に就いているだろうか？ 外に出て行けないほど雪が積もる前に……家畜たちの様子を見に行くことにしよう。彼女はランタンを取り上げ、頭までショールを巻き、外に出て行った。彼女は丁寧に動物たちの世話をし、そして家へ戻ろうとすると、何か幽霊の叫び声のようなものが風に乗ってきた……地上の生き物から発せられたというよりはむしろ、空から聞こえてきたような気がした……聞こえたのは苦悩の声だったが、何と言っているのかは分からず、まるで猛禽が渦を巻く氷のような風に取り込まれ、その暴力に痛めつけられているかのような感じだった。また聞こえる！ 遥か上の方から！ スーザンはランタンを下に置き、大声で返事をしてみたが、本能的に頭に浮かんだのは、一瞬思ったように声をあげているのが人間ではなかったとしたら、大声で返答したとして何の効果があるというのか？ そして、彼女の叫びは情け容赦ない風に捉えられ、苦悩の声が聞こえたのとは別の方向に追いやられてしまった。また、聞こえた。単なる音ではない、すると向こうの方からまた聞こえ、やっと彼女は人間の声であることを確信した。彼女は家の中へ入ると、泥炭と薪を山のように暖炉に入れた。というのは、自分自身が寒いのに気づいていなかったために、彼女は火が弱くなりほとんど消えてしまうままだになっていたのだ。ランタンに新しい蠟燭を入れ、毛織のショールに替えてドアに門を下ろすと外に出て行った。外に出ようとして、彼女の耳に不気味な嵐の音が入ってきたときに初めて、「ああ、神様、お助けを！」という言葉聞いたような気がした。それらが確かに言葉であったとして、彼女はそれが聞こえる方へ

と進んだが、それはイチイ農場から四分の一マイルのところにある岩場からではなく、急な斜面にあるために曲がりくねった小道から聞こえていた。彼女は雪と風に公然と対抗し、声の方へと歩を進め、雪に覆われていてもそれと分かるイバラや枝をなくした樫の木を目印にしながらさらに進んだ。時々立ち止まって耳をすまし、しばらくの間、一言の言葉も音も聞こえなかったが、雑木が茂り岩の下に絡みついていて小道をぐるりと周っているときに、唸り声が聞こえた。その声は消え……見たところ雪ばかり……彼女のいるちょっと高い場所の周りはほとんど雪の原……彼女は雑木林に入り、よろめいたりつまづいたりしながら必死に歩を進めた。ランタンの持ち手を歯ではさみ、手と同じように頭を振って道を開き、身体がどんなに傷つこうとお構いなしだった。雪に覆われた土地は平らではないために、上ったり、よろめいたりしていると、不思議にやわらかくしなやかなものに足があたった。ランタンを下げると、男がうつ伏せに倒れていて、絶えず降ってくる雪にほとんど埋まりかけていた。大急ぎで滑りやすい斜面を下りているときに、道が曲がりくねっていることに気づかず、上の岩から落ちたに違いない。誰だって気づかないだろう。いや、あれこれ考えている暇はない。スーザンは強靱な力で男を抱えた……まだ温かい……毛織のショールを男に巻きつけ、ランタンの持ち手をエプロンの紐で結んだ。男を立てせ、半ば抱え半ば引きずり……多少切り傷を受けても命を助けるためには仕方がない……そう、大切な命を助けなければならぬ！ 彼女は男を引きずりながら雪に埋もれた小道を進んだ。ほんの一瞬だけ、立ち止まって息をついたが、復讐の女神^{注7}に取り付かれたかのように、人間業とは思えないような力で彼女は進んでいった。男の手を腰に回させ、ドアの横木にぐったりした男の体重をもたせかけると、門を外そうとしたが、そのとき、ちょうどその瞬間に、気が遠くなるような震えを覚え、言いようのない恐怖に襲われた……ここで、まさにこの入り口で自分が死んでいるのが発見されるかもしれない、そう雪の下で、朝、農場の作男たちがやって来たときに、この恐怖感を取り払うように、スーザンは最後の力を振り絞った。そして彼女とその男は台所という温かい避難所へとたどり着いたのである。彼女は男を長椅子に寝かせ、自分はその傍らの床に沈み込んだ。どのくらいの時間気絶していたかは分からないが、正気に戻ったときに火がまだ赤くところと燃えているところを見ると、それほど長い時間ではないようだ。彼女は蝋燭に火を点し、運んできた男の方に身体を曲げ死んでいるのかどうか確かめようとした。じっと見ながら彼女は長い間立ちすくんだ。彼は死んでいる。疑いはない。その霞んだ目は閉じられずに彼女の方を見ている。スーザンは死にぞっとさせられたからといって、怯えたりはしない。彼女が立ちすくんだのは、そうではなくて、辛く悲痛な思いを抱いたからだ……それはマイケル・ハーストだったのだ！

彼女は彼の死を確信したが、しかし、しばらくして、その確信から目を背けることにした。震える手で、急いで、

湿った上着を剥ぎ取った。自分のベッドから毛布を持ってきて火を起こした。洗いたての温かい衣服で彼を包み、火の前の敷石にその身体を下ろすと、頭を持ち上げて自分の膝に乗せ、乱れて湿った髪を丁寧に拭いた。彼女が最後に彼に会ったときの木の葉のような茶色い髪の毛は、鉄のような灰色に変わってはいたが、それは紛れもなくあの巻き毛だった。ときどき彼女はその顔を覗き込んだが、顔色は悪いものの、きらめく火によってびくっと動くのではないが、彼女は思った。しかし、見開かれた空ろな目が彼女を心の芯まで冷たくさせた。ついに彼女は、優しくもかいがいしい世話を止めたが、愛撫するかのように優しく頭を抱きつづけた。そして、ほんのちょっとしたきっかけで終わってしまう生命の物語のあらゆる可能性について、思いを巡らしてみた。もし、母親の風邪がもっと早く治療されていれば、弟の幸福と苦悩に関する責任から、私は免れていたかもしれない……もし、熱病が荒々しく残酷にウィリーに襲い掛かっていなければ……ゲイル夫人が、あの世知にたけた厳しい姉が、最後にイチイ農場を訪れたマイケルに同行していなければ……もちろん、最後とは言っても、彼がこの運命的な嵐の夜にここに来る前のことだ……もし、スーザンが彼の叫びを聞いていなければ……この青白い、死に絶えた唇が、荒々しい失意に満ちた苦悩の叫びを吐いたのだ。ああ、あれから三時間も経っていないのに！……ああ！ もし、彼女がもっと早く叫びを聞いていれば、心もとないふらふらとした足取りで岩から落ちる前に彼を救えたのかもしれない！ 現実にはならなかったこれら一連の可能性について思いを巡らしながら、スーザンはペギーの言葉の真の意味を知った。振り返れば、人生は短いのだ。彼女の愛が溢れて、しかも無に帰ってしまったのはほんの昨日の出来事のようなものだ。今での年月は……実年齢よりも早くスーザンを老婆に変えてしまった長い単調な年月は……夢に過ぎなかったのだ。^{注8}

冬の日の夜明けにやって来た作男たちは、低い台所の窓から暖炉の灯りが見えるのに驚いた。扉を叩くと、唸るような返答を聞き、女主人に何かあったのかと心配しながら中に入っていった。説明として彼らが聞いたのは次の言葉だった。

「マイケル・ハーストだよ。季節はずれにやってきて、カラス岩から落ちたのさ。奥さんのエリナーはどこに住んでいるんだい？」

マイケル・ハーストがどうやってイチイ農場にやって来たのかを、スーザン以外の誰も知らなかった。彼女が彼を引きずったために、打ち身から内出血を起こし、僅かに残っていた生命の光が消えてしまったのだらうと、人は考えたが、並みはずれた力で彼を探し出し、それからここまで連れてきたなどとは、誰も考えられなかったであろう。スーザンだけが知っていることなのだ。

スーザンは彼の世話を作男に任せ、外に出ると馬に乗った。風が雪を道の片側に寄せたために、雪のないところを通ることができた。スーザンは馬をどんどん急がせた。時

折、柔らかく紛らわしい雪の山が見られるようになったため、彼女は馬から降り深みにはまりながら、ものすごい力で馬を引っ張った。心の痛みがまるで屈強な雪かき機であるかのように、彼女を前へと進ませたのだ。

灰色の重々しい冬の昼間は、夏の夜よりも夜らしかった。白い地面を紫の微かな照らす中、スーザンは生前マイケル・ハーストが住んでいた場所へと進んでいった。それは中も外も、よく手入れされているとは言えない農家の家だった。美しいエリナー・ヘブスウェイトは今でも美しかった。その優美な顔は、長く耐え忍ぶ感情に歪められたことが一度もなかったのである。たとえあったとしても、憂いを帯びた悲しげな表情になるだけであったし、柔らかい色の髪の毛に白髪はほとんど見られず、頬は、若いときのように光り輝いてはいないにしても、セイロンアサガオのような赤みに変化は無かったし、すんなりとした鼻や小さな口は過ぎた時間の影響を受けていなかった。こういう折なのに、スーザンは自分とエリナーとの違いを感じた。スーザンは自分の肌が陽に焼けて褐色になり、皺が刻まれ……歯は抜け落ち、髪は白くぼさぼさなのを知っていた。彼女はエリナーよりも二歳も年長ではないのに……外見を気にし始めた若い頃、スーザンの容姿はこうではなかったのに。エリナーは馬を連れた、見知らぬ女に戸惑いながら立ちすくんでいた。スーザンは扉を叩くのを止めたが、馬の手綱を握ったまま、中に入ろうとはしなかった。

「マイケル・ハーストはどこ？」と、スーザンはついに口を開いた。

「あの……よく分からないんです。主人は昨夜うちにいなければならなかったんですけど、でも、外出して、ウルヴァストーンで貸しに出されている、居酒屋の様子を見に行っていて、農場にはいなくて、それで、私もどうしたのかなあと……」

「昨夜、戻らなかったんだね？」とスーザンは言葉を遮りながら、辛い現実を残酷にも露呈する前に、半ば確認するような半ば問いただすような言い方をした。

「ああ！ 主人はウルヴァストーンのあたりに泊まっているんだわ。あの人はうちで絶対に必要な人ですもの、家畜の面倒を見る手助けをしてくれるのは小さなトミーしかいないです。いろいろとうまくいなくて、作男を雇っていないので。でも、あの、あなた震えていらっしゃるわ。中にお入りになって、温まってくださいな、あなたの馬を休ませてあげてください。あれが厩の扉です、あなたの左側」

スーザンは馬をそこに連れて行くと、腹帯を緩め、一握りの藁でその身体をこすった。それから干草はないかと辺りを見まわしたが、そこに飼料はなく、使われていないことをうかがわせる臭いがした。家に帰り、心遣いに礼を言い、パンをいくらかもらおうと、パケツ一杯のぬるい湯にひたした。万事休すだったが、これから自分がしなければならないことを思うと、一瞬ごとに恐ろしさがつっていった。最初思ったよりも、長い時間が経っていたかもしれない。

鞍を外し、馬の周りをぶらついていると、どういうわけか、この世に馬以上の味方はいないと思われた。馬の首に頬を押しつけ、エリナーの待つ家に戻る前にそこで心を静めた。

エリナーは古いガウンを取り出し、スーザンのために火の傍の椅子にかけて暖めていた。そして、見知らぬ訪問者に一杯の熱いお茶を入れた。スーザンにはこれらの小さな心遣いが耐え難く思われて、息が詰まるほどだったが、衣服は濡れ、疲れと動揺とですっきり弱っていたので、言葉でも身振りでも拒絶することはできなかった。ふたりの子供がその場の雰囲気戸惑い、間が悪そうに突っ立っており、エリナーも、この見知らぬ訪問者が何者なのか、説明を求め始めた。

「あなたは、たぶん、ご主人から私の話を聞いておいでですね？ 私はスーザン・ディクスンです」

ネリーは真っ赤になり、スーザンの視線を避けた。

「私は村の人たちがあなたのことを話すのを聞いたことがありますけど、あの人が口にしたことはありませんわ」

このときの沈黙がスーザンには芳香であるかのように感じられた。その香りが漂ってきたときには気にも留めなかったが、結局のところたいへんありがたかった。

スーザンは言いよどんだり、声を震わせたりしないと心に決めて、「ご主人はうちにいます」と言った。当然のことながら、心の痛みが伴った。

「あなたのお宅に？ イチイ農場にですか？」と驚いたエリナーが尋ねた。「どうしてあの人はあなたのお宅へ？」と半ば嫉妬を感じながら言った。「嵐を避けるためかしら？ おっしゃって……何かあるのね……おっしゃって、ねえ！」

「うちに避難なんかしていない。神に召されたのよ！」

「え、神に？ 神に召されたですって！」と、疲れ切った目が意味する悲しみのすべてを知って、エリナーは金切り声を上げた。彼女の叫びが家を劈いた。「パパ、パパ」という子供たちの甲高い悲痛な叫びが、スーザンを骨の髄まで突いた。しかし、スーザンは時計の大きな文字盤のように動じず、涙を見せもしないままだった。

ついに、泣き声が止んだときに、彼女は言った……質問しているというよりも、半ば独り言のように……

「あなたは彼を愛していたのね？」

「愛していたか、ですって！ あの人は私の夫なんですよ！ グラスミアの教会の庭で眠っている三人の可愛い子供たちの父親なのよ。もう出て行ってください、スーザン・ディクスン、そして、あなたのことなんか気にせず、私に涙を流させて！ ここの近くにはもう来ていただきたくないわ」

「ああ、あの人はもう生き返らない！ あの人を救うためなら命を投げ出してもよかったのに。私の人生は悲しいだけのだから！ 私が死んでも誰も気に留めない。ああ！ ああ！」

こう嘆いたスーザンの声音は哀れで失望感に満ちており、エリナーをちょっとの間だが黙らせるほどだった。しかし、

少しづつエリナーは言葉を回復して言った。「怪我をさせるために犬を外に出したりしませんけど、外は明るいですし、トミーがレッド・カウまでご案内しますわ。でも、ああ、独りになりたいの！もし明日また来てくださるのなら、私も今より落ち着いていますし、お話を全部聞きますわ。それに、主人にしてくださったご親切のひとつひとつにお礼を言うわ……ええ、私はあなたがあの人に親切にしてくださったと思うわ……どうしてなのかは分かりませんけどね」

スーザンは重々しい妙な動きをした。

そして何か言ったが、その言葉は不明瞭で理解することができなかった。彼女は嘆きの言葉を言い終えたときに、麻痺を伴う発作を起こしていたのである。出て行きたいと思っても、動くことができなかった。エリナーも、スーザンの体調の変化に気づき、出て行ってくれとは言わなかった。エリナーはスーザンを自分のベッドに寝かせ、亡き夫を想って静かな涙を流しながら、まるで姉にするようにスーザンを看病した。彼女はスーザンの世間的な地位も知らなかったし、金を支払ってくれるかどうかも分からなかったが、細々としたものを売ってスーザンに必要であろうものを購入した。スーザンはじっと動かずに横たわりながら、多くのことを知った。それは深刻な発作ではなかった。今後起こすであろう発作の前兆のものであったようだが、次の発作までにはまだ時間がある。そして、取りあえずは回復し、かつての健康をかなり取り戻した。病の床に横たわりながら、計画を練った。イチイ農場に戻るとき、マイケル・ハーストの妻と子供たちを連れて行き、いっしょに暮らすことにした。そして、炉辺を生气でいっぱいにした。幽霊が消え去ってしまうように。

そして結局、スーザン・ディクソンのその後の人生は、それ以前よりもよいものであった。

注

本稿は、第一章、第二章に続く、Elizabeth Gaskell (1810-65)の中篇小説“Half a Life-time Ago” (1859)の日本語訳「半生をかえりみて」の第三章、第四章、第五章である。原文からの引用はすべて、Cousin Phillis and Other Tales (Oxford: Oxford UP, 1981) 59-102 による。

- 1 この部分は、第三章冒頭の“Michael stormed, and absented himself for two or three days” (78) と矛盾している。
- 2 旧約聖書ルツ記 I:16 の“Nought but death shall part thee and me!”。スーザンの行動の根本にあるキリスト教の精神については、矢次の注の6を参照。
- 3 オーストリア南東部、シドニー付近の湾で、もとは英国の流刑植民地だった。
- 4 悲しみをこらえてパンを焼くスーザンの姿について、シャープスは、“Susan’s quiet heroism in following her

conscience, finally illustrated by the clap-bread episode”と指摘している。(Sharps 248) 矢次の注の6で述べた通り、この小説はウェストモラントの丘陵地域の地誌的な要素が濃い、恋人を失ったスーザンが「丘陵地帯の女にとって最もきつく力の要る仕事」であるパン焼きに取り組もうとする様に、小説中でしばしば言及される“Daleswoman”として、果敢に人生を歩んでいこうとする彼女の強い意志が感じられる。

- 5 ユーグロウは、危機的状況に直面したギヤスケルのヒロインたちに、年配の女性の使用人が精神的な救いと人生の教訓をしばしばあたえていると指摘する。そして、ペギー同様にこのような役目を果たす使用人として、Ruth (1853) の Sally や、Cousin Phillis (1863-64) の Betty らの名前を挙げている。(Uglove 264)
- 6 スーザンはこの重要な場面でもイチイの木の下にいる。矢次の注の2と12を参照。
- 7 原語では“the Furies”。ギリシア神話に登場する神、Gaeaの娘たちで、翼を持ち、髪は蛇、手にたいまつを持って罪人を追い、狂わせたという。最初は姉妹の数は限りがなかったが、後に Alecto, Megaera, Tisiphone の3人に限定された。ギリシア名は Erinyes, Eumenides。ローマ名は Furiae, Dirae である。
- 8 注の5で指摘したペギーの垂れた教訓が、人生の真実としてスーザンの心によみがえっている。

参考文献

- Sharps, John Geoffrey. Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works. Fontwell, Suss.: Linden, 1970.
- Uglove, Jenny. Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories. London: Faber and Faber, 1993.
- 矢次綾. 『半生をかえりみて』試訳：第一章、第二章」
『宇部工業高等専門学校研究報告』